

Gordon Research Conference に参加して

東邦大学 医学部 村井晋



私は 2018 年 8 月 5 日から 10 日にかけて開催された Gordon Research Conference の Cell death meeting (2018) に参加しました。Conference における Cell death meeting の歴史は古く、1995 年から約 1 年おきに開催されています。今回は「Cell Death Mediators in Normal and Disease Physiology」というテーマで、メイン州郊外の Newry で開催されました。当地はボストンから 300km ほど北に位置するウインターリゾートですが、夏場もフライフィッシングやカヌーなどが楽しめる自然豊かな場所です。参加者は約 130 名と少数でしたが、欧米の研究者に加えアジアや豪州からも研究者が参加して国際色豊かな学会になっていました。

5 日の午後から始まった口頭発表はいくつかのセッションに区分され、Discussion leader の司会のもと進行されました。いずれのセッションも現在の細胞死研究を牽引している研究者たちによる発表で、その全てを居ながらにして聴けるだけでも参加する価値がありました。特に印象的だったのは発表内容のほとんどが未発表データだったことでした。当然、議論すべき点が多くあるため質疑応答の時間は非常に活発な discussion が繰り広げられました。

発表内容は今回の学会のテーマが示す通り、細胞死そのものの研究に加えて、ウイルス感染やがんなど疾患に対する治療戦略、細胞競合や器官のサイズ決定など正常組織での役割、Caspase や Gasdermin など細胞死関連分子の新たな機能など「細胞死」をキーワードとした非常に多彩なものでした。特に Death receptor と RIPK の新たな細胞内機能に関してはそれぞれ個別のセッションが設けられており、研究の新たな展開に高い関心を持たれていることがうかがわれました。

口頭発表以外にポスター発表もあり、私は「A Novel FRET Biosensor for Necroptosis Uncovers Two Different Modes of the Release of DAMPs」というタイトルで発表いたしました。ポスターは偶数番号と奇数番号に分けられ、それぞれ別日に発表時間が設けられました。発表時間が 2 時間与えられていたためじっくりと議論することができました。

またポスター発表の中からいくつかの演題が口頭発表に採択されており、私の演題も口頭発表に採択されました。口頭で自身の研究を発表する機会を得ることができたのは非常に貴重でした。口頭発表のインパクトは予想以上に大きく、興味を持った参加者が

らは共同研究の申し出も受けました。発表したことで自分の研究が広がって行くことを実感できる経験でした。

会期中は昼食後2時間半の自由時間が毎日設けられていました。参加者それぞれアーチェリーやハイキングを楽しんだり、メンバーを募ってサッカーや卓球などのスポーツに興じたりしていました。私はせいぜいホテルの周辺を散策する程度でしたが、それでも自然をたっぷり謳歌できました。最終日には近くにあるスキー場の山頂にある山小屋でパーティーが催されました。ロブスターを食べたり、フロアでダンスをしたり、バーでアルコールを飲んだりしながら、皆でワイワイと賑やかな時間を過ごしたことも参加したことの楽しい思い出となりました。

参加して「現在、細胞死研究でどのようなことが興味を持たれているか」、「それぞれの研究グループが何に取り組んでいるのか、そして辿り着いているポイントはどこか」といったことをトップレベルで知ることが研究を進めて行く上で非常に重要だと改めて痛感いたしました。末筆になりますが、今回の学会参加を支援していただいた新学術領域ダイニングコード代表の田中正人先生はじめ同領域の関係者の方々に深く御礼申し上げます。

